|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| スライド 1 |  |  |
| スライド 2 |  | 通常の学級の場で学ぶ子供の実態は当然のことながら多様です。さらに通級指導教室に通う子供や特別支援学級に在籍し、交流及び共同学習に取り組む子供も学んでいます。通常の学級担任は多様性を認め合う集団づくりを行っていく上で、通級指導教室に通ったり、特別支援学級に在籍する子供を含めた多様な実態の子供を理解する必要があります。そのためには教師同士の「連携」が必要です。まずは、通常の学級担任と通級指導教室担当との「連携」の視点から考えていきたいと思います。 |
| スライド 3 |  | 「連携」を進めていくには、まず通常の学級担任も「通級による指導とは何か」を理解する必要があります。通級による指導とは、小・中学校等で通常の学級に在籍する障害のある児童生徒が、各教科等の大部分の授業を通常の学級で受けながら、一部の授業について障害に応じた特別の指導を特別の指導の場で受ける指導形態です。また、指導を行う際には、当該学校の教育課程に加え、または、その一部に変えて行うものであり、通級による指導を受ける児童生徒については、特別の教育課程を編成する必要があります。 |
| スライド 4 |  | そして、さらに困難さに応じた細やかな「個へのアプローチ」も大切になってきます。そこで、通級指導教室では、主に自立活動を参考に指導が行われています。子供の「思い」や「願い」を大切にして、適切な実態把握を行った上で、困難さに応じた指導・支援を行い、子供が主体的にその困難さの改善克服に取り組めるように関わっています。また、信頼できる人と安心できる環境で、人と関わることの良さを感じることそのものも大切にしています。 |
| スライド 5 |  | 実際の「自立活動」を参考にした指導の中では、安心感のある指導者との人間関係の中で、人との関わりを通して自分の得意なことや苦手なことを理解することも大切にしています。まずは、子供自身が自分自身のよさに気付き、肯定的に自己を理解し、自己肯定感を積み重ねることができるような関わり方を大切にしています。そして、このように肯定的な自己理解ができるようになって初めて自分の苦手さや困難さと向き合うことができるという前提で実践が積み重ねられています。 |
| スライド 6 |  | また、肯定的な自己の理解ができることで、自分の苦手なことや困った状況に向き合うことだけでなく、自分の可能な方法で環境（人や物）に働きかけることが大切です。その際、人に尋ねたり、頼んだりすることも必要となってきます。自分が困った時に人に尋ねたり、頼んだりして支援を依頼することで「分かった」「できた」という成功体験を積み重ねられるようにしています。では、通級指導教室で具体的にはどのような指導が行われているのでしょうか。また、通級指導教室の担当者と在籍学級の通常の学級担任とどのように連携をして子供を理解し、指導を進めていけばよいのでしょうか。これから、実践事例をもとに紹介したいと思います。 |
| スライド 7 |  | まず、実践事例の概要です。在籍学級において、話を最後まで聞くことが難しく早合点をして、失敗したり、自分の気持ちを言葉で伝えることが難しく友達とトラブルになったりすることが多いＴさんの事例です。通級指導教室の担当者と在籍学級の担任が何を連携し、どのように指導や関わりにつなげていったのでしょうか。 |
| スライド 8 |  | 通級指導教室で自立活動を参考にした指導を行うには、通級指導教室で指導を受けるＴさんの実態把握を行う必要があります。そのために、通常の学級の担任と通級指導教室の担当者がＴさんの様子について情報の共有を行いました。Ｔさんが何に困っているのか、なぜ、そうせざるをえないかという視点から、「行動の背景要因は何か」を考えていきました。そして、「これが改善されると過ごしやすくなる」という視点から「困難さに応じた指導・支援」を考え、通級指導教室における長期目標を導き出しました。この長期目標を通常の学級の担任も把握して、在籍学級での指導・支援の参考にしていくことは大切です。  さて、この長期目標を達成するために、通級指導教室では、どんな指導を行ったのでしょうか。 |
| スライド 9 |  | これは、三つのヒントをすべて聞いてからカードを選んで答えを言うルールでスリーヒントクイズをしている場面です。Ｔさんが話を最後まで聞いて、落ち着いて活動できるように指導を進めています。クイズを行っている時にヒントを二つ聞いた瞬間にカードを選ぼうとする気持ちはありましたが、最後までヒントを聞いて正解のカードを選ぶことができました。その時のＴさんの内面を読み取り、通級指導教室の担当者は、「すぐに取りたい気持ちをよく抑えたね。先生にはよく伝わったよ。我慢しようとしたところがＴさんの素敵なところだよ。」と即時に言葉で評価をし、価値づけていました。また、Ｔさんが、最後まで聞いたら「できた」「分かった」という成功体験を積み重ねられるように意識して関わっていました。 |
| スライド 10 |  | 続いては、活動内容や質問内容が分からなかった時の解決方法についてＴさんと通級指導教室担当者で一緒に考えている場面です。Ｔさんは、質問内容がよく分からなくても考えずに発言をしたり、答えたりして失敗することがありました。通級指導教室では、様々な指導場面で意識して、分からなかった時には、尋ねたり、頼ったりして解決する方法を一緒に考えるようにしています。Ｔさんは、クイズや聞く活動の際、「もう１回言ってください。」と先生に伝え、理解して答えることができました。「尋ねる」「頼る」といった学び方も大切であることを伝え、価値付けていました。 |
| スライド 11 |  | 一方で通級指導教室に通う子供が多くの時間を過ごすのは、在籍学級です。在籍学級の担任が通級指導教室の担当者と連携を行うことで、「思い」や「願い」、困難さや得意・不得意、指導内容等を把握し、「子供の理解」を一層深めていくことが大切です。通級指導教室と全く同じことはできませんが、在籍学級においてできる指導・支援つまり「個へのアプローチ」につなげることができます。また、それだけではなく学級の一人一人の子供の「思い」を大切にした関わりや多様な学び方を認め合う等学級全体の支援につながるように「集団のアプローチ」につなげていくことも重要です。このような視点が通級指導教室との「連携」において大切となってきます。では、具体的には、在籍学級でどのようなことができるのでしょうか。 |
| スライド 12 |  | 在籍学級の担任は、通級指導教室の担当者との連携から通級指導教室での指導目標を意識した関わりや「肯定的な自己理解」ができるように関わりを工夫することが考えられます。具体的には、どのようなことができるでしょうか。例えば、子供のよさを見付け、広げることも考えられます。  通級指導教室で「話を最後まで聞いて活動する」ことを目標にしているので、在籍学級でも「最後まで聞く」ことを前置きして、できたらすぐに褒める。また、通級指導教室の担当者にも在籍学級の頑張りを伝えて褒めてもらえるように、頑張りカードを作る。さらに、Ｔさんだけでなく、在籍学級の一人一人の児童の良さや頑張りを帰りの会で伝えたり連絡帳に書いたりして伝える等が考えられます。 |
| スライド 13 |  | また「連携」では、特に通級指導教室の子供にだけでなく在籍学級全体の支援につなげる視点が大切です。例えば、通級指導教室で「尋ねる」「頼む」という学びを支える方法を大切にしていたので、在籍学級の授業の中で、「尋ねて学ぶ」「複数で取り組む」等の場を意図的に設定するような工夫も考えられます。例えば、一人で全部できることのみを「よし」とするのではなく、「教えてもらってできる」「手伝ってもらってできる」「複数で取り組んでできる」等の場を意図的に設定し、いろいろな学び方があっても良いという学級の価値観を醸成する。また、全員に対して、分からない時、難しい時は、「助けを求める」「友達に尋ねる」方法でやってもよいという見通しが持てるような指示を出すなど、通級指導教室での取組をＴさんだけの指導・支援ではなく、学級全体の子供の支援につなげ、広げていくことが大切です。 |
| スライド 14 |  | 在籍学級では、通級指導教室と全く同じような指導・支援はできません。しかし、通級指導教室で大切にされていたように子供の思いを大切にし、子供が互いに「認め合い」「支え合い」が実現できるような関わり方に繋げることも必要です。また、肯定的な自己理解を支えたり、「支援を依頼する」等の関わりを大切にしたりして学級全体の実態に応じ、学級全体の子供の指導・支援に繋げていく視点が大切です。ぜひ、通常の学級における指導・支援の参考にしていただけたらと思います。 |